

家族と世帯の研究史

文化人類学と歴史学を中心として

木下太志

Households and the Family Revisited

Futoshi Kinoshita

はじめに

今日、私たちが日常的に使っている日本語の「家族」という言葉は、明治時代以降に使われるようになってきたものであり、江戸時代以前には、これに相当する言葉として「家（いえ）」という言葉が使われていた。文化人類学者の中根千枝氏によると、日本語の「いえ」は、本来「かまど」を意味する言葉「he」に前頭詞「i」がついたものであるという（1970：15）。江戸時代には、家という言葉は、たとえば、「家持（いえもち）」などのように使われ、これは家を持って一戸を構えることを意味した。また、この言葉は実際の物理的な建物という意味だけではなく、家計や暮らし向きという意味でも使われた。一方、「世帯」あるいは「所帯」という言葉は、元来、朝廷の官職を意味するものであったが、中世になって、それが転じて、荘園の領地、家産、資産を指すようになった。さらに江戸時代になると、この言葉は「世帯を持つ」「世帯じみる」「世帯くずし」などのように用いられ、一戸を構えて独立の生計を営むという意味で使われるようになった。

英語で家族に相当する言葉は family であるが、これはラテン語の「familia」がその語源である。この言葉は、元来、ひとつの屋根の下に暮らす奴隷や召使いのすべてを意味していたようであるが、後に、彼らの主人も含められるようになり、最終的に、親族を含めた集団を示すようになった（Zonabend 1996:8-9）。また、世帯に相当する英語は household であるが、これはギリシャ語で主人に従う妻子や奴隷、あるいは主人の所有物の総称を意味していたようである（Herlihy 1993）。たとえば、英語の economics（経済学）は、元々、ギリシャ語の oikos（世帯）を統治する学問（the science of ruling households）という意味であったという。

いずれにしても、家族や世帯はあまりにも私たちの身近にあって、ごく自然な存在であるため、家族の崩壊を経験したり、あるいは人生の危機に際し、家族から特別な支援を受けたなどというような場合を除いては、改めてそれについて深く考えることは少ない。しかし、家族や

世帯は、私たちが生活していく上で重要な社会単位であることは説明するまでもない。普段の会話では、私たちは、家族と世帯という2つの言葉を同じ意味を持つ言葉として使うことも多い。しかし、この2つの言葉の意味をもう少し正確に知るために、手許にある日本語の辞書(『広辞苑(第3版)』)を引いてみると、家族の項には、「夫婦を始め、生活を共にする親子・兄弟などの血縁集団、社会構成の基本単位」とある。ここでの「親子・兄弟」の兄弟は、実際には姉妹も含むものと理解すれば、この説明は素直に頭に入る。一方、世帯あるいは所帯の項には、「住居および生計を共にする者の集団」と説明してあった。

この辞書にあった2つの言葉の意味は、現在の文化人類学者の使い方に近い。文化人類学では、家族は血縁集団あるいは疑似血縁集団であることが強調される一方、世帯は住居を共にする共住集団であることが強調される。すなわち、家族は、そのメンバーが血縁関係あるいは養子のような疑似血縁関係で結ばれていることが条件で、ひとつの屋根の下で寝食を共にすることを必ずしも必要としない。一方、世帯は、そのメンバーの結び付きが血縁関係あるいは疑似血縁関係である必要はなく、ひとつの屋根の下で寝食を共にすることを条件とする。したがって、妻子と離れて単身赴任をしている父親や都会で下宿生活をしている大学生は、妻子あるいは両親と一緒に住んでいなくても、彼らと同じ家族のメンバーであると言える。このように、家族と言うときには、メンバー間の感情的絆や互いの権利と義務、あるいはもっと一般的に言えば、メンバー間のネットワークを強調することが多い。一方、大学を卒業し、両親と離れて、アパートで自活するようになった新入社員は、両親の世帯から独立した新しい世帯に暮らしていると言える。同様に、江戸時代の商家などによくみられた奉公人は、彼らの雇い主の世帯のメンバーとして数えることができる。

ところが、現在の日本においては、家族と世帯が重なり合う場合が多い。たとえば、両親とその子どもがアパートに住んでいる場合、この集団はひとつの家族(あるいは家族の一部)であると同時に、ひとつの世帯でもある。このように、2つはオーバーラップする部分が多いため、通常の会話のなかで、私たちが家族と世帯という二つの言葉をあまり区別せず、あたかも互いに交換可能なように使っている原因となっているのであろう。実際、専門家が書いた本の中にも、タイトルには家族という言葉が使われていても、実際には世帯のことが書かれているような場合もある。家族と世帯の重なり合う部分が多いということからすれば、このようなこともある程度無理からぬことなのかも知れない。本稿では、この区別しにくく、しばしば混乱を招く家族と世帯をよりよく理解するとともに、従来研究成果を整理するために、主に文化人類学と歴史学の研究を概観してみたい。文化人類学と歴史学とは、やや奇妙な組み合わせと思われる人も多いかも知れないが、実は、家族と世帯の分野では、両者は互いに交流してきており、近年、この関係はさらに密接なものになってきているのが現状である¹⁾。

1. 家族

文化人類学では、文化の定義は文化人類学者の数だけあるとよく言われるが、これは文化と

という言葉が広範な意味を持っているということ、それを研究する文化人類学者の関心が様々であるということにその理由がある。すなわち、文化人類学者がある社会を研究する場合、その社会の文化全体を研究することは到底できないので、自分が興味を持つ文化の一部を切り取って研究することになる。文化が多様であるということに加えて、これらの興味も多様であるため、文化人類学者の一人ひとりが文化を定義しようとする、様々な定義ができあがってしまうことになる。同様のことが、家族の研究についても言える。世界の様々な社会における家族のあり方は多様であるうえに、ひとつの社会をとってみても、そこにみられる家族の様相は同じものではない。また、家族を研究する文化人類学者、歴史学者、社会学者たちの関心が様々であることも、この問題を複雑にしている。

社会科学における家族研究の歴史は古い。たとえば、18世紀の著述家 John Millar は、家族を性的欲望やロマンチックな恋愛を満足させる場所としては捉えず、その経済的・教育的機能をより強調し、科学的に捉えようとした (Harris 1968:31-33)。19世紀に入ると、モルガン、スペンサー、マルクス、エンゲルス、メイン、ファーガソン、パッサオーエン、マクレナン、ル・ブレイ、ド・トクヴィルなど、後世に名を残したそうそうたる人物たちが家族の研究を行い、この分野は活気を呈した。この時期に、家族研究が盛んになった理由は2つ考えられ、いずれも当時の急速に変わりつつあった社会状況を反映している。第一の理由は、この時期に船舶や鉄道などの交通機関が発達し、人々の移動が活発になったため、アジアやアフリカなどのヨーロッパ以外の地域に住む様々な民族、特に未開部族についての知識が蓄積された。これらの知識をもとに、多くの社会学者が、社会が単純なものから複雑なものへと進化していくとする社会進化論の立場から、人間の原初の社会組織を解き明かそうとし、そこで家族を論じた。未知の社会を研究する場合、そのメンバーを一人ひとり調査することは煩雑であるうえに、メンバー間のバリエーションも大きく扱いにくい。その点、家族がちょうどよい適度な大きさの研究単位となったのである。たとえば、19世紀の社会進化論者の代表的人物の一人として知られる文化人類学者のモルガンは、アメリカ先住民の親族組織に精通しており、それをもとに『古代社会』という書物を著した (1958, 1961)。そこで、彼は人間社会は野蛮から未開へ、未開から文明へと進化するにともない、その社会組織も乱婚のような状態から、兄弟姉妹婚や血族・姻族を基礎としたものへ、その後、家父長制を基礎としたものへ、そして、最終的には私有財産を基礎としたものへと進化すると考えた。

19世紀に家族の研究が盛んになった第二の理由は、この時期のヨーロッパ、特に西ヨーロッパにおいて、工業化にともなう都市化が急速に進んでおり、多くの労働者が地方から都市へ流入してきた。その結果、都市における捨て子や非嫡出子の増加、青少年犯罪の増加などの様々な社会問題が生じるとともに、古い道德体系は崩壊しつつあり、このことが社会全体を非常に不安定なものにしていた。このような状況の下で、社会学者たちは、社会に秩序を与え、その安定を保つためには、人々が確固とした道德観を持つことが必要であり、家族こそがその重要な役割を担うものであると考えていたからである。たとえば、フランスの社会学者ル・ブ

レイは、この代表的人物である（Nisbet 1966: 61-70）。このような19世紀のヨーロッパの状況は、青少年の非行と犯罪が深刻化しつつあり、その原因のひとつとして家庭の崩壊などが真剣に議論される現在の日本の状況と相通じるところがある。

文化人類学では、20世紀に入ると、フィールドワークを重視する人たちが増え、彼らにより、モルガンのような考え方は批判されるようになってきた。「アメリカ人類学の父」と呼ばれるボアズは、モルガンや他の社会進化論者が家族形態のような親族組織と社会構造が密接な関係にあるとしたことに異議を唱えた。また、モルガンは、原初の間人社会は乱婚状態であったとしたが、このような考え方も見直されるようになってきた。たとえば、ローウィーは、原初の間人社会は乱婚状態にあったわけではなく、家族を基本としたものであり、家族こそが人間社会の第一義的な集団であると主張した。また、ニューギニア島の東に位置するトロブリアンド島の親族組織を熟知していたマリノフスキーは、家族の中でも、核家族こそが人類の基本的社会組織であるとした。

ところで、文化人類学者は、家族をどのように定義してきたのであろうか。家族の定義として、しばしば引用されるのがマードックによる定義である。マードックは、社会組織の研究を専門とした文化人類学者であったが、家族を以下のように定義した。

家族は共住、経済的協力、再生産を特徴とする社会集団であり、それは成人の男女（少なくともそのうちの二人は社会的に認められた性的関係を持つ）およびこの二人自身の、あるいは養子として迎えた一人以上の子供を含む（Murdock 1965 (orig.1949) : 1, 筆者訳）。

この定義では、家族の機能として、共住、経済的協力、再生産の3つをあげている。経済的協力と再生産については問題はないであろうが、共住が家族のひとつの条件でなければならないという考え方が、当時の文化人類学者の間で一般的であったかどうかは疑わしい。たとえば、リントンは、家族の最小限の条件として、成人男女の存在とこの二人の関係が長期間にわたって継続することのみをあげ、家族は必ずしも一緒に住む必要がないと考えていた（Linton 1964 (orig. 1936):158-9）。また、社会学者のパーソンズも、家族は子供の養育とメンバーの精神的安定という2つを本質的機能とする親族集団であり、必ずしも共住を前提としないとした（Parsons 1943）。前述のように、現在の文化人類学では、家族はメンバー間の感情的絆や互いの権利と義務を強調した親族集団あるいは疑似親族集団であり、共住をその条件としないというのが一般的な考え方である。

これらの研究は、家族がそのなかに持つ、言わば「内的」な機能に注目したものであるが、家族の「外的」な機能に着目した文化人類学者もいる。20世紀後半の最も著名な文化人類学者の一人であるレヴィー・ストロースは、家族に再生産、子どもの社会化、メンバーの精神的安定などの機能があり、同時に、そこに人間の生物学的欲求（たとえば性欲や出産）を満たす機

能があることを認める。しかし、彼にとってより重要なことは、家族と家族の間（あるいは社会と社会の間）で男女を交換することによって、両者の協力関係（alliance）が作り出されることであり、レヴィー・ストロースは、そこに家族と社会の接点を見い出そうとした（Levi-Strauss 1969, 1996）。

また、家族の機能について、どの社会にも適用し得るような普遍的な定義を下すことはできないという、やや極端で懐疑的な立場もある。たとえば、Yanagisako は、以下のように述べている。

私たちが家族と呼ぶ社会単位は多種多様で、すべてが同じ種類の機能を持っていると考えたり、その主要な機能がいつも同じであると考えerことは誤りである。もし私たちがこのような考え方を脇に置き、それぞれの社会における家族の機能を見つけ出そうとするなら、同時に私たちは、家族の最小限の核とその普遍的定義を捨て去らなければならない（1979：200，筆者訳）。

確かに、まず家族の定義を先に決め、それから様々な社会の家族（あるいは家族と考えられる社会単位）を研究することは、この社会単位が持つ機能の多様性からして、多くの問題が生じることは予想できる。これは、家族を研究する文化人類学者あるいは社会学者全体にとってのジレンマである。しかし、Yanagisako のような立場は、研究上の家族の普遍的定義を否定するという、いわば研究方法論上のものであっても、本質的な家族（あるいは家族のような社会単位）自体の存在とその重要性を否定するものではない。

2. 世帯と家内集団

家族に比べると、世帯という言葉が研究者によって使われるようになった歴史は浅い。たとえば、19世紀の社会学者たちは、たとえ現在では世帯という言葉がより適切であるような場合でも、家族という言葉を好んで使った。文化人類学において、世帯という言葉が一般的に使われ始めるようになったのは1960年代頃からであるが、その頃には、世帯はひとつの屋根の下で寝食を共にする集団と定義されていた（Bohann and Keesing cited in Bender 1967）。ところが、いくつかの民族事例では、この世帯の定義が不適切であることがわかってきた。たとえば、南アメリカに住む Mundurucu 族の間では、夫は通常、妻子と離れて、メンズハウスと呼ばれる家屋で他の男たちと住むが、同時に、この夫は狩猟で獲得した獲物を妻子のところへ持っていく義務がある（Bender 1967）。もし世帯を居住単位とすれば、Mundurucu 族の男たちにとって、メンズハウスが世帯となる。しかし、食事や育児などのほとんどの家事はメンズハウスで行われているわけではないので、これは誤解を生みやすく、不都合である。

このような問題に対処するために、ベンダーは、家族や世帯よりやや抽象的な概念として家内集団（domestic group）という言葉を作り出した。ベンダーによると、この家内集団は、メ

メンバーの同居、親族間の権利と義務の遂行、家事活動 (domestic activities) という3つの機能を持つ。家事活動とは、具体的には、食事の準備・提供、子供の世話などを含んだ日々の生活を行う上での必要な活動のことである。グーディーは、このベンダーの定義に修正を加え、家内集団が持つ機能には、経済的活動 (たとえば、生産、消費、土地所有権、相続) 再生産、居住、親族に関わる権利と義務の遂行、子供の社会化があるとした (Goody 1972)。文化人類学者が家内集団という言葉を使うとき、それは親族間のネットワークを強調する家族の概念と居住を強調する世帯の概念の両方を含むため、家内集団の家族的側面と世帯的側面などということも可能である (e.g., Carter 1985)。

上でみたように、文化人類学者が家内集団を研究する際、その機能に着目することが多い。これは、あたかもいくつかの連続写真の中から、最も適当な写真を見つけてきて、それを詳細に研究する作業に似ているので、静的な研究としばしば呼ばれる。一方、これに対して動的な研究とは、連続写真の例で言えば、一枚一枚の写真の変化を逐次追っていくような研究である。たとえば、家内集団のメンバーは、内的な人口学的要因 (出生、死亡、人口移動) によって変化し得るし、また外的な経済的要因によっても分裂や結合をするであろう。このような家内集団の動的側面に最初に注目したのは、イギリスの社会人類学者であるフォーティスであった。彼は、人間が子供から大人へ成長していくように、家内集団も時間とともに変化していくと考えた。フォーティスは、西アフリカのガーナに住むタレンシ族の研究から、「家内集団は成長し、変化し、そして分解していく……。ある特定の家族形態はこのサイクルの一瞬の姿であるに過ぎない。タレンシ族の家族は、それが時間の上に存在しているということから切り離すことはできない。私たちは、家族をひとつのプロセスとして研究すべきである (Fortes 1949:63, 筆者訳) と主張し、家内集団の「発展周期 (developmental cycle)」という言葉を作り出し、そのサイクルのそれぞれの局面を「発展段階 (developmental phase)」と呼んだ。

しかし、フォーティスにとっては、家内集団の発展周期はひとつのまとまったシステムであり、ひとつの社会構造であった。ビルマ (現在のミャンマー) 高地の民族を研究したリーチも社会構造の動的側面に注目した一人であった。しかし、リーチは、フォーティスの家内集団の発展周期のような比較的短い時間的スパンの変化ではなく、100年、200年という長いスパンの歴史的变化により興味を持っていた。すなわち、ビルマ高地では「 Gumsa (gumsa)」と「 Gumlao (gumlao)」という2つのグループが存在し、それぞれ独自の社会構造を持っている。ところが、100年、200年というスパンで、これらのグループの歴史をみると、 Gumsa が Gumlao のような社会構造を持つように変化すると同時に、 Gumlao が Gumsa のような社会構造を持つように変化するという一種の循環システムを作りあげていると主張した (Leach 1954)。つまり、リーチは、家内集団の形態や機能についても、そのシステムが永遠に継続するわけではなく、時間の経過とともに変わり得ることを示した。

これまでみてきた文化人類学者による家族、世帯および家内集団に関する研究をまとめることは容易ではない。しかし、これらの研究が私たちに教えるレッスンとして、次の2点をあげ

ることは難しくはない。すなわち、(1)世界中のどの社会にも当てはまるような家内集団の普遍的な定義を作るとは困難である。なぜなら、家内集団の機能と形態は多様であり、異なった社会では異なった様相を示すうえに、同じ社会の中でも、異なった集団では異なった様相を示すからである。(2)家内集団をよりよく理解するためには、文化人類学者が伝統的に行ってきたクロスセクショナルな研究だけではなく、歴史的な研究が必要である。

前述の Yanagisako が主張したように、厳密な意味において、家内集団の定義ができないということは、文化人類学者にとってジレンマである。これでは、異なる社会の家内集団を比較研究をすることなどまったく無意味になる。というのは、比較研究のために、私たちは何を比較してよいのかわからなくなるからである。ウィルクとネッティングは、このジレンマを解決するひとつの案を示した (Wilk and Netting 1984)。彼らは、文化人類学者に大きな影響を与えた『Households-Comparative and Historical Studies of the Domestic Group-』という著書の中で、世帯を仕事を遂行するための居住単位 (task-oriented residence unit) と定義し、その普遍性を (特に集約農耕社会において) 主張した。ウィルクとネッティングによると、世帯は、生産、資源の分配、富の移動、再生産、共住という5つの行動圏 (activity sphere) を持つが、比較研究のためには、すべての社会の世帯が同じ行動圏を持つ必要はないという。ある社会の世帯では、たとえば資源の分配という活動圏が強調され、生産という活動圏は強調されない一方、他の社会の世帯では、生産が強調され、資源の分配は強調されないというように、異なった社会で、それぞれの行動圏の比重に差があってもよいという。ただし、どの社会においても、この5つの行動圏が重なり合った部分があるはずで、この重なり合った行動圏の主体である社会単位を世帯と呼ぶことによって、世帯の比較研究が可能になるとウィルクとネッティングは主張した。この重なり合った行動圏こそ、ハンメルが「最大の共同体的機能を持つ最小の集団 (the smallest grouping with the maximum corporate function)」(Hammel 1980) と呼んだものである。

3. 歴史学における家族と世帯の研究

文化人類学者と同様に、歴史家も家族と世帯に関心を持ち続けてきた。彼らの関心の中心は、歴史の中で家族や世帯がどのように変遷してきたかということであり、特に、近代化がどのように家族を変化させたのかということは大きなテーマである。ヨーロッパを例にとると、近代化以前は、直系家族 (stem family) と呼ばれる家族形態が一般的であったと伝統的に考えられてきた (Le Play 1864 cited in Laslett 1972, Wachter 1978)。直系家族とは、日本の伝統的な3世代家族のように、ひとつの家族内に2組以上の夫婦が存在するが、ひとつの世代には1組だけの夫婦しか含まないものである。たとえば、祖父母、戸主夫婦、その子供たちという構成が直系家族である。直系家族では、ひとつの世代に1組の夫婦ということが原則なので、戸主の兄弟姉妹たちは、彼らの結婚の前後に、戸主と袂を分かたなければならない。

イギリスの歴史人口学者ラスレットとウォールは、16世紀から19世紀の3世紀にわたるイン

グランドの住民台帳の実証的研究から、このような伝統的考え方に異論を唱えた(Laslett 1965, Laslett and Wall 1972)。綿密な分析の結果、ラスレットたちは、(1)16世紀から19世紀のイングランドにおける世帯形態は核家族が主であり、直系家族に代表される拡大家族は全世界の10%程度を占めるに過ぎない、(2)この3世紀の間、イングランドは産業革命のような大きな社会経済的变化を経験したにもかかわらず、この間の平均世帯規模は4.50人から4.75人程度で驚くほど安定していたことを発見した。近代化以前の家族形態が核家族であったという事実は、イングランド以外にも、北フランス(Blayo 1972)、オランダ(van der Woude 1972)、スイス(Netting 1981)などでも確認された。たとえば、歴史人口学的研究を最初に行った文化人類学者の一人であるネットィングは、19世紀のスイスの山村の研究から、この村には、拡大家族が確かに存在したが、それは家族の移行期における一時的な形態であるに過ぎず、核家族がこの村の社会規範であったと結論づけた²⁾。

ラスレットたちの結論は、研究者に驚きをもって迎えられた。その理由として、2つが考えられる。第一の理由は、当時の一般的な考え方は、工業化や都市化などのいわゆる近代化と総称されるものによって、家族はその規模と複合性を減じ、拡大家族のような大きな家族から、移動性などの面において、近代社会の労働市場により適した核家族に変化するということであったからである。ラスレットたちの結論は、このような考え方を支持せず、近代化によって、家族形態が直系家族のような拡大家族から核家族へ変化した形跡は見当たらないとした。逆に、産業革命期のイギリスの都市では、結婚した子供とその両親の同居が増えて、世帯規模が増加する傾向もみられた(アンダーソン 1988)。第二の理由は、ラスレットたちの結論が、一部の上流階級の人々やある特定の人々を対象としたものではなく、人口の大半を占める一般民衆を対象としたものであったということに加えて、データの信頼性を入念にチェックしたうえで行われた非常に緻密な実証的研究の産物であったからである。

一方、ラスレットたちの研究に対する批判もある。そのひとつは、近代化以前のヨーロッパにおいては、明らかに拡大家族を社会規範とする地域が存在し、ヨーロッパ大陸のなかでも、家族形態に地域差があったというものである。たとえば、ロシア、バルカン半島、南フランスやイタリアなどの南ヨーロッパにおける近代化以前の世帯形態は核家族ではなく、拡大家族であったことが報告されている(e.g., Hammel 1972, Kertzer and Hogan 1989: 53-63)。したがって、ラスレットたちの結論は、ヨーロッパ全土について言えることではなく、北西ヨーロッパについてのみ言えることなのである³⁾。これに関連して、ヘイナルは、工業化以前のヨーロッパにおいて、単純世帯システムと合同世帯システムという2つの世帯形成システムがあったとしている。彼によると、単純世帯システムとは、17、18世紀の工業化以前の北西ヨーロッパにおいて一般的にみられた世帯形態で、次の3つを原則とする(Hajnal 1965, 1982)。

- (1) 男女どちらも晩婚である。
- (2) 結婚後、花婿と花嫁は自分たち自身で新しい世帯を形成し管理する(通常、夫が世帯主となる)。

(3) 結婚前の若者たちは、奉公人として世帯間を移動する。

一方、合同世帯システムは、南ヨーロッパで典型的にみられる世帯形態であり、以下の3つを原則とする。

- (1) 単純世帯システムに比べ、男子の結婚年齢は低いが、女子の結婚年齢はさらに低い。
- (2) 若夫婦は、老夫婦が管理する世帯で生活し始めるか、あるいは年老いた寡夫または寡婦が世帯主である世帯で生活し始める。そして結婚後、妻が夫の世帯にはいるのが普通である。
- (3) 複数の夫婦を含む世帯は、1組の夫婦あるいはそれ以上の夫婦を含む2つ以上の世帯に分裂することがある。

南ヨーロッパにみられる合同世帯システムは、中国やインドにおいてもみられることから、ヘイナルは、世界的にみれば、単純世帯システムは北西ヨーロッパに特有のシステムであったとしている。

ラスレットたちの研究に対するもうひとつの批判は、パークナーに代表されるものである。パークナーは、直系家族のような社会規範は、社会規範としては存在していたとしても、家族の発展周期、人口学的要因、経済的要因によって、必ずしも、常に実現されるものとは限らないとしている（Berkner 1972）。彼は、18世紀の南オーストリアの世帯調査記録の研究から、この地域の拡大家族の割合は全体の25%と低いものの、これは家族の発展周期や人口学的要因によって、拡大家族が実現されなかつただけに過ぎず、この地域の社会規範はやはり拡大家族であったに違いないと結論づけた。パークナーが主張するように、人々が頭の中に描く理想的な社会規範と現実に実現される家族形態が違うのであれば、住民台帳のような歴史資料から復元された家族をそのまま社会規範と捉えることには慎重にならざるを得ない。

このように、パークナーは実際の家族形態を決定するものとして、社会規範に加えて、家族の発展周期、人口学的要因、経済的要因をあげたが、家族形態と人口学的要因の關係に注目した研究者の中に、文化人類学者のリーヴィがいる。リーヴィーは、家族形態を決定するための人口学的要因が果たす役割という観点から、伝統社会と近代社会を対比させている（Levy 1965）。すなわち、伝統社会においては、人々が出生や死亡をコントロールすることがほとんど不可能であったため、彼らが理想とする家族形態は必ず実現されるとは限らない。一方、近代社会においては、出生は様々な手段により抑制され、また病気や死亡も医療技術や公衆衛生の発達によりコントロールされるようになるため、大きな障害なしに、理想とする家族形態が実現されるとする。このように、リーヴィーは人口学的要因を家族形態の重要な決定要因とみなし、言わば「家族形態の人口学的決定論」とでも呼ぶべき主張をした。

このようなリーヴィーの主張に対し、フォーラーは、家族形態の決定要因をより広く捉え、次の4つの要因を提案した（Faller 1965）。

- (1) 生物的要因：出生、死亡
- (2) 心理的要因：ストレス、摩擦

(3) 社会文化的要因：養子、相続

(4) 経済的要因：人口移動、結婚年齢

家族形態を家族メンバーの構成とみると、この構成を変える直接の要因は、出生、死亡、人口移動の3つによるものしかない。したがって、フォーラーが決定要因としてあげた養子や結婚（年齢）は、それまで家族メンバーであったものが家族を離れたり、それまで家族メンバーでなかったものが新しく家族に加わるなど、人口移動を通して、家族形態が変わるものと考えることができる。また、彼が心理的要因として挙げているストレスや家族内の摩擦についても、家族形態を変える直接の原因は人口移動の場合が多い。このように、フォーラーが家族形態を決定する要因としてあげているもののほとんどは、直接的には人口学的要因として扱うことができる。ただし、彼が社会文化的要因としてあげている相続（たとえば、長子相続や末子相続）については、人口学的要因として扱うことは難しい。

文化人類学者のハンメルと統計学者のワクターは、コンピュータシミュレーションと呼ばれる方法によって、人口学的要因がどの程度まで世帯形態を決定するのかという問題を解決しようとした（Hammel and Wachter 1977, Wachter 1978）。シミュレーション（simulation）とは、「見せかけ」や「模擬」という意味で、この場合、人が生まれ、結婚して、新しい世帯を形成し、年老いて死んでいく、というような現実の世界で起きる人口事象や世帯の変化を、コンピュータ上で再現する作業のことである。人口事象が起きる頻度などを変化させ、それが世帯形態にどのような影響を与えるのかをみれば、人口学的要因と世帯形態の関係を調べることができる。言わば、シミュレーションとは、コンピュータ上で社会現象の実験を行っているようなものである。

ハンメルとワクターは、世帯形態を決定する要因として、(1)社会規範（相続など）、(2)結婚率、出生率、死亡率などの人口学的パラメータ（平均値）、(3)これらの人口学的パラメータのランダムな変動という3つを考え、幾分簡略化されたモデルを作り、世帯形成のシミュレーションを行った。彼らの結論は、以下の3点に要約することができる。(1)社会における様々な世帯形態を決定する最も重要な要因は社会規範である。(2)その次に重要な要因は、結婚率、出生率、死亡率などの人口学的パラメータのランダムな変動である。(3)第三番目の要因は、人口学的パラメータ（平均値）であり、当初考えられていたより、その効果は弱い。第一の結論は順当な結論であるが、この結論と第三の結論を考え合わせると、前述したレビューによる家族形態の人口学的決定論は否定されたことになる。第二の結論は、研究者をやや驚かせた。なぜなら、世帯形態の決定には、人口学的パラメータのランダムな変動より、その平均値の方が強い影響力を持つと一般に考えられがちだからである。これは、結婚率、出生率、死亡率などの人口学的パラメータの平均値だけではなく、そのちらばり方（i.e., 分散）の研究も必要であることを研究者に示した。

ハンメルとワクターによるシミュレーションは、この分野では最初の試みであり、人口学的要因と世帯形態の関係について、きわめて明瞭な結論を出したことに意義がある。しかしなが

ら、彼らの結論が最終的な答えかという点、必ずしもそうではない。ハンメルとワクターは、モデルを簡略化する過程で様々な仮定を設けた。それらの仮定は、現実的なものも多いが、非現実的なものも含まれている。たとえば、彼らのモデルでは、人口移動が起きないか、あるいは起きても、世帯形態を決定する要因としては無視できる程度の効果しか持たないと仮定されている。人口学では、出生と死亡に比べ、人口移動が取り扱いにくいいため、人口移動が起きないと仮定することがしばしばあるが、ハンメルとワクターのシミュレーションモデルもこの例外ではない。ハンメルとワクターは、彼らのモデルのなかの人口学的パラメータとして、前工業化期のイングランドのものを使っているが、この社会の人口移動率が高かったことは既に明らかにされている（Laslett 1965, Schofield 1970）。また、人口移動と世帯は、しばしば密接な関係にあることも指摘されている。たとえば、スイスの村においては、人口移出が平均世帯規模を低下させると同時に、新しい世帯のためのニッチ（e.g., 土地と家屋）を拡げ、世帯数を増加させる効果があったことが報告されている（Hagaman, Elias and Netting 1978）。このようなことからすれば、ハンメルとワクターのシミュレーションによって、人口学的要因と世帯形態の関係が完全に解明されたというわけではなく、今後の研究に期待するところが大きいと言える。

4. まとめ

私たちは、家族や世帯についてよく知っていると考えがちであるが、意外と理解していないというのが現実である。これは、家族や世帯が私たちにあまりにも身近な存在であるため、例外的な場合を除いては、それについて改めて考えないことが多いからであろう。例外的な場合とは、青少年による非行や犯罪が増加して、様々な社会的混乱が表面化し、その結果、人々の心に漠然とした不安感が広がる時などがこれにあたるであろう。このような時に、私たちは、しばしば家族というものを考え直す。これは、人々の道徳観や価値観が家族のなかで育まれるものであるということ、私たちが暗黙の了解として捉えているからに違いない。たとえば、産業革命とフランス革命という大きな社会経済的な変化の影響を受けた18、19世紀のヨーロッパがそうであり、また、人々の価値観が急速に変化し、多様化しつつある現在の日本もこのなかを含むことができるであろう。

本稿では、文化人類学と歴史学という2つの分野を中心に、家族と世帯に関する研究の歴史を概観した。文化人類学と歴史学とは、幾分奇妙な組み合わせと思われる人が多いかもしれないが、実は、歴史人口学と呼ばれる分野の発展を通して、この2分野は急速に接近し、両者の研究領域がオーバーラップするようになってきたというのが近年の世界的な潮流である。この2分野は、その研究手法上、互いに補完できる立場にある。というのは、文化人類学は、伝統的にフィールドワークを重視し、研究対象である人々と直接に接しながら、インタビューなどを通して、家族規範や親族組織について詳しい研究をしてきた。しかしながら、たとえば結婚年齢などに注目する文化人類学者は稀で、また彼らのフィールドワークも、通常1年から2年

程度と短期間であるため、彼らが研究する社会の長い歴史的变化を研究することは実際上ほとんど不可能であった。一方、歴史家あるいは歴史人口学者は、フィールドワークとインタビューの代わりに、歴史資料を駆使して、そこから復元される世帯形態や結婚年齢を割り出し、100年、200年、時には300年という長いスパンの家族や世帯の変化を研究してきた。したがって、歴史学あるいは歴史人口学と文化人類学との関係は、前者の欠けているところを後者が補い、後者に欠けているところを前者が補うという補完関係にあるということが出来る。本稿で概観した過去30年あまりの研究成果は、この補完関係が実りの多いものであることを証明してきた。この2つの分野の協力によって、近代化と家族の関係などの社会科学における重要な課題が解決される日もそれ程遠いことではないであろう。

注

- 1) このような近年の状況を反映するものとして、日本語の文献では齋藤(1988)、ラスレット(1992)、前川(1993)、英語の文献では、Harrel(1995)、Burgiere et al.(1996a, 1996b)などを参照されたい。
- 2) 文化人類学者による歴史人口学的研究は、近年次々と出版されているが、代表的なものとして、Netting, Wilk and Arnould(1984)、Kertzer and Hogan(1989)、Kertzer and Fricke(1996)、Macfarlane(1986,1997)などを参照されたい。
- 3) 1970年代以降の研究を基礎に、ラスレットはヨーロッパの家族世帯形態を4地域に分類している(Laslett 1983, Laslett 1984)。

引用文献

アンダーソン・マイケル

1988 「産業革命と世帯構造 十九世紀中葉プレストンにかんする比較史的考察」(浜野潔訳)『家族と人口の歴史社会学』齋藤修編著 pp.187-223. リプロポート。

Bender, Donald R.

1967 A Refinement of the Concept of Household: Families, Co-residence, and Domestic Functions. *American Anthropologist* 69(5):493-504.

Berkner, Lutz K.

1972 The Stem Family and the Developmental Cycle of the Peasant Household: An Eighteenth-Century Austrian Example. *American Historical Review* 77:398-418.

Blayo, Yves

1972 Size and Structure of Households in a Northern French Village between 1836 and 1861. In *Household and Family in Past Time*. P. Laslett and R. Wall, eds. Pp.255-265. Cambridge: Cambridge University Press.

家族と世帯の研究史

- Burquiere, A., C. Klapisch-Zuber, M. Segalen, and F. Zonabend (eds.)
 1996 A History of the Family Vol. I: Distant Worlds, Ancient Worlds. Cambridge: Polity Press.
- Burquiere, Andre, C. Klapisch-Zuber, M. Segalen, and F. Zonabend (eds.)
 1996 A History of the Family Vol. II: The Impact of Modernity. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Carter, Anthony T.
 1985 Households Histories. In Households. R. M. Netting, R. R. Wilk and E. J. Arnould, eds. Pp.44-83. Berkeley: University of California Press.
- Fallers, Lloyd A.
 1965 The Range in Actual Family Size: A Critique of Marrison Levy Jr's Argument. In Aspects of the Analysis of Family Structure. M. J. Levy Jr., ed. Pp.70-82. Princeton: Princeton University Press.
- Fortes, Meyer
 1949 The Web of Kinship among the Tallensi. London: Oxford University Press.
- Goody, Jack
 1972 Domestic Groups. Addison-Wesley Module in Anthropology 28. Reading: Addison-Wesley Publishing Company, Inc.
- Hagaman, R., W. S. Elias and R. M. Netting
 1978 The Genetic and Demographic Impact of In-migrants in a Largely Endogamous Community. Annals of Human Biology 6:505-15.
- Hajnal, John
 1965 European Marriage Patterns in Perspective. In Population in History. D. V. Glass and D. E. C. Eversley, eds. Pp.101-143. Chicago: Aldine.
 1982 Two Kinds of Preindustrial Household Formation System. In Population and Development Review 8(3):449-494.
- Hammel, E. A.
 1972 The Zadruga as Process. In Household and Family in Past Time. P. Laslett and R. Wall, eds. Pp.335-373. Cambridge: Cambridge University Press.
 1980 Household Structure in Fourteenth Century Macedonia. Journal of Family History 5:242-273.
- Hammel, E. A. and K. W. Wachter
 1977 Primonuptiality and Ultimonuptiality: Their Effects on Stem-Family Household Frequencies. In Population Patterns in the Past. R. D. Lee, ed. Pp.113-134. New York: Academic Press.
- Harrel, Steven (ed.)
 1995 Chinese Historical Microdemography. Berkeley: University of California Press.
- Harris, Marvin
 1968 The Rise of Anthropological Theory. New York: Harper & Row, Publishers.

Herlihy, David

1984 Households in the Early Middle Ages: Symmetry and Sainthood. In Households. R. M. Netting, R. R. Wilk and E. J. Arnould, eds. Pp.383-406. Berkeley: University of California Press.

Kertzer, David I. and Dennis P. Hogan

1989 Family, Economy, and Demographic Change. Madison: University of Wisconsin Press.

Laslett, Peter

1965 The World We Have Lost. New York: Scribner.

1983 Family and Household as Work Group and Kin Group: Areas of Traditional Europe Compared. In Family Forms in Historic Europe, R. Wall, et al, eds. Pp.513-63. Cambridge: Cambridge University Press.

1984 The Family as a Knot of Individual Interests. In Households. R. M. Netting, R. R. Wilk and E. J. Arnould, eds. Pp.353-379. Berkeley: University of California Press.

ラスレット・ピーター

1992 『ヨーロッパの伝統的家族と世帯』酒田利夫・奥田伸子訳 リプロポート。

Laslett, Peter and Richard Wall (eds.)

1972 Household and Family in Past Time. Cambridge: Cambridge University Press.

Leach, E. R.

1954 Political Systems of Highland Burma. Boston: Beacon Press.

Lévi-Strauss, Claude

1969 The Elementary Structures of Kinship. Boston: Beacon Press.

1996 Introduction. In A History of the Family Vol.1. A. Burguiere et al. eds. Pp.1-7. Cambridge: Polity Press.

Levy, Marrion J. Jr.

1965 Aspects of the Analysis of Family Structure. In Aspects of the Analysis of Family Structure. M. J. Levy Jr., ed. Pp.1-63. Princeton: Princeton University Press.

Linton, Ralph

1964 (orig.1936) The Study of Man. New York: Appleton-Century-Crofts.

Macfalane, Alan

1986 Marriage and Love in England: Modes of Reproduction 1300-1840. Oxford: Basil Blackwell.

1997 The Savage Wars of Peace: England, Japan and the Malthusian Trap. Oxford: Blackwell.

前川 和也 (編)

1993 『家族・世帯・家門』ミネルヴァ書房。

モルガン・L・H

1958 『古代社会上』青山道夫訳 岩波書店。

1961 『古代社会下』青山道夫訳 岩波書店。

- Murdock, George Peter
1965 *Social Structure*. New York: Free Press.
- 中根 千枝
1970 『家族の構造 社会人類学的分析』東京大学出版。
- Netting, Robert McC
1981 *Balancing on an Alp*. Cambridge: Cambridge University Press.
1993 *Smallholders, Householders*. Stanford: Stanford University Press.
- Netting, Robert McC, Richard R. Wilk and Eric J. Arnould (eds.)
1984 *Households*. Berkeley: University of California Press.
- Nisbet, Robert A
1966 *The Sociological Tradition*. New York: Basic Books.
- Parsons, Talcott
1943 *The Kinship System of the Contemporary United States*. *American Anthropologist* 45:22-38.
- 斎藤修編著
1988 『家族と人口の歴史社会学』リプロポート。
- Schofield, Roger S.
1970 *Age-specific Mobility in an Eighteenth Century Rural England Parish*. *Annales de Demographie Historique*: 261-274.
- van der Woude, A. M.
1972 *Variations in the Size and Structure of the Household in the United Provinces of the Netherlands in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. In *Household and Family in Past Time*. P. Laslett and R. Wall, eds. Pp.299-318. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wachter, Kenneth W.
1978 *Statistical Studies of Historical Social Structure*. New York: Academic Press.
- Wilk, R. R. and R. M. Netting
1984 *Households: Changing Forms and Functions*. In *Households*. R. M. Netting, R. R. Wilk, and E. J. Arnould, eds. Pp.1-28. Berkeley: University of California Press.
- Yanagisako, Sylvia J.
1979 *Family and Household. The Analysis of Domestic Groups*. *Annual Review of Anthropology* 8:161-205.
- Zonabend, Françoise
1996 *An Anthropological Perspective on Kinship and the Family*. In *A History of the Family Vol.1*. A. Burguiere et al. eds. Pp.8-68. Cambridge: Polity Press.